The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「存在は存在者なしには決して現成しない」：「『形而上学とは何か』への後記」第四版と第五版との異同をめぐって
Author(s)	西松, 豊起
Citation	メタフュシカ. 2004, 35, p. 89-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「存在は存在者なしには決して現成しない」
― 「『形而上学とは何か』への後記」第四版と第五版との異同をめぐって ―

西松豊起

1929 年に行なわれたハイデガーのフライブルク大学就任講義『形而上学とは何か』の第四版(1943)に付加された「後記」と第五版(1949)以降のそれとの間には、しばしば議論の的になる異同がある。すなわち、第四版の「後記」では、存在の真理には「存在は確かに存在者なしに現成(wesen)する」ということが属していると言われていたが(GA9,306,Anm.2)、第五版の「後記」では、この箇所は、「存在は存在者なしには決して現成しない」というように全く正反対のことを述べている記述に変更されたのである。本論考では、この変更をめぐっての二、三の論者の解釈を検討し、最後に我々自身の解釈を提示する。まずは準備考察から始めよう。

１　区 - 別としての存在それ自身

『存在と時間』(1927)だけを読んでいる限りでは、存在と存在者とを区別したのはハイデガーが最初であって、彼以前の形而上学はあたかも存在と存在者との区別を知らなかったかのように思われてくるが、それは見当違いである。プラトンのイデアにせよ、ニーチェの「力への意志」にせよ、存在者の存在を名指している、というのがハイデガーの形而上学解釈である。ただ、ハイデガーにとって決定的な問題であるのは、形而上学が存在者の存在として思惟しているものが、彼から見ればまだ存在者でしかないということである。それは、形而上学の「存在‐神論」(Onto‐Theologie)ないしは「存在‐神‐論」(Onto‐Theo‐Logik)と呼ばれる体制において存在が存在者へと置き移されることに起因する。形而上学は確かに、存在者が存在なしには存在しないということを承認しはするが、しかしそう言うか言わないうちに存在を再び一つの存在者へと置き移してしまう(NⅡ,347)。形而上学は存在者そのものを思惟しつつ飽くまで存在から関わられていながら、しかし存在を、存在者を目掛けて存在者の方から思惟するが故に、形而上学そのものは最上位に存在している根拠という意味での神的ナルモノ(θειον)を言表(λέγειν)せざるを得ない。その意味で形而上学はそれ自身において神論(Theologie)である。それは、形而上学が存在者としての存在者を言い表す限りにおいてである。すなわち、存在論は同

時に必然的に神論なのである(NⅡ,347f.)。以上は「ニヒリズムの存在史的規定」(1944/46)における叙述であるが、「形而上学の存在‐神‐論的体制」(1956/57)では、形而上学の存在論的局面と神論的局面とに関して次のようにまとめられている。形而上学が、如何なる存在者そのものにも共通の根拠に着目して存在者を思惟する場合には、形而上学は存在‐論(Onto‐Logik)としての論理学(Logik)である。他方、形而上学が、全体としての存在者そのもの(das Seiende als solches im Ganzen)を、すなわち一切を基礎づける最高の存在者に着目して思惟する場合には、形而上学は神‐論(Theo‐Logik)としての論理学である(ID,63)。ここで》Logik《という名称は、全体としての存在者そのものを到るところで根拠(Λόγος)としての存在から根拠究明し(ergründen)且つ基礎づける(begründen)思惟を表わす名称として理解されている(ID,50)。存在‐神‐論(Onto‐Theo‐Logik)はこのような意味での Logik である。形而上学は存在者そのものを思惟する際に存在を見遣りつつ(hinsichtlich)存在者を思惟するという限りにおいては、存在は存在者の形而上学的な根拠なのであるが、しかしこの根拠としての存在は飽くまで存在者を思惟するために存在者の方から立てられた根拠にすぎないのであり、従って根拠としては存在者を根拠づけ(gründen)ながらも、それ自身存在者によって基礎づけられることを要求する――但しそれは、根拠にふさわしい仕方での基礎づけであり、最高の存在者による原因づけであるが――。つまり、存在‐神‐論的体制においては、存在が存在者を根拠づけ、最高度に存在するもの(das Seiendste)としての存在者が存在を基礎づけるわけである。そして、存在はこのように基礎づけられた限りで、「最高の」という留保つきではあっても一つの存在者であることに変わりはないものへと移行する。このようにして存在者へと置き移された限りでの存在を、ハイデガーは存在者の「存在者性」(Seiendheit)と名づける。

このような存在‐神‐論的体制は、その本質由来を「分け担い(der Austrag)」のうちにもっている(ID,60)。そこで、こう言われる。「分け担いとは、一つの回転であり、存在と存在者とが互いに相手をめぐって回転することである」(ID,62)。こうした事情から、存在‐神‐論的体制においては存在と存在者とは相互に入り混じり、俄には識別し難い状態になっている。それ故、中期以降のハイデガーが「存在」と言うとき、形而上学が問うてきた存在者の存在、すなわち存在者性を指しているのか、それともそのように形而上学的に思惟された存在とは異なって、ハイデガーが自らの思惟の事柄とする存在を指しているのか両義的であるが、それに応じて、中期以降「存在者」と言われる場合にも、我々に身近に出会ってくる一般の存在者が常に一義的に指されているとは限らず、存在者性という意味での存在者が指されていることがある。ハイデガーが「存在者」という語で存在者性を指している場合があることは、『哲学への寄与』(1936/38)の次の一節によって確証される。「ピュシス(φύσις)は、アレーテイア(ἀλήθεια)として現れ出るが、しかし同時に、アレーテイアを通してそのものとして認取され得る(vernehmbar)ようになる存在者にかまけて忘却され、最高度に存在する存在者へと、すなわち存在者の一つの、そして最高の仕方へと解釈し変えられる。ここに同時に、なぜ存在論的差異がそのものとしては知られないのかという根拠がある。というのは、根本においては常にただ存在者と存在者(最高度に存在するものども)との間でのみ区別づけが必要とされているからである」(GA65,466)。

従って、ハイデガーの中期以降のテクストで存在者に言及されるとき、それによって存在者性が指されているのではないかと注意深く熟慮してみる必要がある。このことを念頭に置いた上で、『思惟とは何の謂いか』第二部(1952)の次の一節に注目してみよう。「現前それ自身とは、まさしく現前するものの現前(Anwesen *von* Anwesendem)である。我々が現前それ自身の諸々の動向を際立たせる場合であっても、現前それ自身はどこまでもそれに留まるのである」(WhD,144)。現前(Anwesen)とは、人間への近接(An‐)における存在の現成(Wesen)を指している。従って、この箇所で言われていることは、「存在それ自身とは、存在者の存在(Sein *von* Seiendem)である」ということとほぼ同義と見做して差し支えない。問題は、この「の(*von*)」という強調された前置詞をどう解釈するかである。強調なしに単に「存在者の存在」というのであれば、それは形而上学の方から見られた存在、すなわち存在者性を指すにすぎない。そこで、この強調された前置詞》von《を「～からの」と解してみよう。そうすると、「存在それ自身とは、存在者からの存在である」となる。だが、「存在者からの存在」とは何を意味し得るであろうか。それは、存在者からの存在の超越を指すことにならないであろうか。全体としての存在者から超越した存在へと当の存在者を乗り越えることは、形而上学の根本動向であり、従ってこの場合の存在は再び存在者性へと逆戻りする。それが、ハイデガーの思惟の事柄である存在それ自身であるはずがない。しかし、先に我々が注目したことに従って、ここで言われている存在者とは存在者性を指していると解釈する可能性がまだ残されている。その解釈を採ると、「存在者性からの存在」と解される存在それ自身とは、存在者性から自らを分離する存在を指すものとして考えることができる。つまり、存在は歴史上、イデア、エネルゲイア、アクトゥアリタス(actualitas)、被表象性(Vorgestelltheit)、定立(Position)、絶対精神、力への意志というように様々な存在者性という形を取って現れてきたが、存在それ自身はそのつどそれらから自らを分離し、存在史の推進力となるのである。かかる分離の生起を、我々は我々の言葉で、存在者性からの「存在の自己差異化」と呼ぶことにしたい。しかし、直ちに付け加えておかなければならないのは、この存在の自己差異化においては、存在が従来の存在者性から自己を単に分離するだけではなく、同時にその存在者性に向かい合ってもいるということである。この「分離されつつ‐向かい合って(auseinander‐zueinander)」という微妙な不即不離の関わり合いは、「形而上学の存在‐神‐論的体制」で、「区‐別(Unter‐Schied)」という語によって指し示されている。「超来(Überkommnis)と到来(Ankunft)とが向かい合わせに保持され、つまり分離されつつ‐向かい合わせに担われているところの間(das Zwischen)を、区‐別が初めて授け、分けて保持するのである。存在と存在者との差異は、超来と到来との区‐別として、両者の露現しつつ‐蔵し匿う分け担いである」(ID,56f.)。

「超来」とは、存在が全体としての存在者の共通にして且つ最高の根拠としての存在者へと移行することを意味している。その存在の超来によって、存在者はそれ自身からして非覆蔵的なものとして初めて到来する(ID,56)。例えば、プラトンのイデアを思い起こしてみればよい。イデアとは、オントース・オン(ὄντως ὄν, 真ノ存在（者）)へと超来した存在である。それに対して、メー・オン(μη ὄν, 非存在（者）)とされる感性的事物は、メテクシス(μέθεξις , 分有)と

いう仕方でイデアに関わることによって、イデアからそれなりの存立を与えられているのである。従って、ここでは区 - 別は存在者性と存在者とが分離されつつ - 向かい合わせに保持されているという関わり合いを指しているにすぎないが、この不即不離の関わり合いは存在と存在者性との間にも統べているものでなければならない。なぜなら、両者の向かい合わせの契機を抜きにして存在が存在者性から単に分離されるだけであるならば、存在は直ちに存在者性へと転倒せずにはいないからである。

２　区 - 別の思惟に到るまでの迷いの道

しかし、ハイデガーが存在それ自身をこのような区 - 別という関わり合いとして思惟するようになるまでには長い歳月を要した。当初、この関わり合いにおける向かい合わせという契機は彼の視野には入ってこず、専ら分離の契機だけが強調される嫌いがあった。ハイデガーは、一時期》Seyn《(原存在）という旧書法を導入したことがあるが、それが用いられ始めた当初には、明らかにその傾向があった。この「原存在」への言及は、既に 1929 年の『根拠の本質について』第一版の欄外註に見られる。そこでは、「必然的に存在的 - 存在論的に分岐した、真理一般の本質」(GA9,134)という記述の「分岐した」という箇所に、次のような欄外註が付されている。「ここでは真理の本質は、確固とした標示としての『区別』の方から、『分岐した』として概念的把握されているが、これとは反対に、原存在の真理の本質に基づいて『区別』を超克することは為されておらず、あるいは『区別』を最初に原存在それ自身として思惟し、そして原存在それ自身において原存在の原存在者(das *Seyende des Seyns*)――もはや存在者の存在としてではなく――を思惟することは為されていない」(GA9,134,Anm.c)。

ここで「区別」と言われているのは存在論的差異を指すものと考えられるが[1]、この時点ではまだ「為されていない」と言われている「『区別』を超克すること」は、『哲学への寄与』(1936/38)に到って達成されることになる。「原存在を原存在史的に問い質すということは形而上学の逆転ではなく、この逆転がなおもまたそのうちに保持されざるを得ないところのかの区別づけ(Unterscheidung)の根拠の企投としての決 - 断(Ent - scheidung, 脱 - 区別づけ)である。そのような企投で以て、この問うことは、存在者と存在とのかの区別づけのそもそも外部へと到る。そしてその決 - 断（脱 - 区別づけ）は、従ってまた存在(Sein)を今や『原存在(》Seyn《)』と表記する。これは、存在がここではもはや形而上学的には思惟されないということを告示せんとするものである」(GA65,436)。

この箇所では「区別づけ(Unterscheidung)」に言及されているが、我々はこれを、「区 - 別(Unter - Schied)」から峻別しなければならない。区 - 別には、区別づける主体は関与しないが、区別づけは悟性の表象作用によって行なわれるのである。そして、1940 年のニーチェ講義『ヨーロッパのニヒリズム』では、「存在者性と存在者との区別づけが、形而上学の本来的な骨組みを形

[1] 1969 年のル・トールでのゼミナールでは次のように言われている。「1927 年から 1936 年までの、存在論的差異への不断の関係もまた、先取りして必然的な迷いの道(Holzweg)として見られなければならないであろう」(VS,104)。

成している」(NⅡ,222)とされる。それ故、同講義では「区別づけ」に対する批判的な観点が提出されている。「『区別づけ』は『差異』という名称によって名指される方が一層適切である。この『差異』という名称のうちで告示されているのは、存在者と存在とが何らかの仕方で相互に‐分けて‐担われ(aus-einander-getragen)、分かたれ、それにも拘らず相互へ関連づけられており、しかも自ずからそうなのであり、『区別づけ』という一つの『行為』に基づいて初めてそうなっているのではないということである。『差異』としての区別づけは、存在と存在者との間には或る分け担いが存立しているということを意味している」(NⅡ,209)。「我々が分け担いを形式的に『区別づけ』として思惟し、そしてこの区別づけのために、区別づける『主体』の一つの『行為』を見つけ出そうとするならば、分け担いは把握され得ない」(NⅡ,210)。

尤も、分け担いは後の「形而上学の存在‐神‐論的体制」の時期から見られるならば、まだ存在と存在者との差異の本質そのものではなく、その「手前の場所」(Vorort, ID,59,64)だとされるのであるが、それはさておき、この 1940 年の講義で敢行されている、区別づけから分け担いへの「退歩(Schritt zurück)」は、先の『哲学への寄与』からの引用に関連づけて言えば、区別づけ(Unterscheidung)を脱することとしての決‐断(Ent‐scheidung, 脱‐区別づけ)に呼応している。「存在者性と存在者との区別づけが、形而上学の本来的な骨組みを形成している」とされる限り、脱‐区別づけとしての決‐断は、存在がもはや形而上学的には思惟されないということを告知せんがために、存在(Sein)を「原存在(Seyn)」と表記することを要請する。その際、原存在は、区別づけの主体の関与しない差異における一方の項に当たるが、しかしこの時期のハイデガーは、その原存在だけを一面的に強調し、これを他方の項である存在者性から分離するだけの傾向に陥っていた。例えば、『哲学への寄与』では、「〔別の原初への〕移行は、原存在の台頭と、現存在のうちに原存在の真理の根拠を据えることとを、存在者のあらゆる出来と認取(Vernehmen)とから分かつ」（GA65,177.〔 〕内は引用者）と言われている。この箇所では、存在者は、「もはや形而上学的には思惟されない」原存在と対比して言及されているのであるから、従来の形而上学が問うてきた存在、すなわち存在者性を指すと解すべきである。このように原存在を存在者性から截然と分離する考え方は、重大な誤りを招くこととなった。それが、冒頭に述べた「『形而上学とは何か』への後記」の記述の変更に関わっているのである。

３　「後記」の記述の変更をめぐる様々な解釈

この変更に関して、ヴァルター・シュルツは次のような解釈を与えている。「存在は確かに存在者なしに現成する」とは、私を徹頭徹尾統べている意味としての存在が決して私の力のうちにはないということを告示している。「それが与える」ところのこの意味は自らを私に贈与する。そのように私を私に与えるものとして存在は決して私に依存していない。それは既に常に「私なしに」現成する。しかし、この「私なしに」ということは、私によって言表された、存在への私の関連の言表である。それは私の自己理解の言表である[2]。他方、存在は「私なしには」決

[2] Walter Schulz, Über den philosophiegeschichtlichen Ort Martin Heideggers, in:*Heidegger. Perspektiven zur Deutung seines Werkes*, Dritte,ergänzte Aufl., hrsg.v.Otto Pöggeler, Belz Athenäum Verlag, Weinheim 1994, S.118f.

して現成しないとは、存在は私から分離されてそれ単独で出来るのでは決してないということである。「私なしに」というこの否定もまた私によって言表された、私の存在関連の言表である[3]。つまり整理して言えば、「現存在がそのつど既にそこから自らを理解するところのものは現存在の自由裁量のうちにはない。すなわち、存在は存在者なしに現成する。しかし、このそこからのそこは決してそれ単独では出来しない。すなわち、存在は存在者なしには決して現成しない」[4]。従って、「第四版と第五版とは同じことを言い表している」[5]ということになる。このように解釈するに当たって、シュルツは「存在者」を現存在という卓抜した存在者に局限しているわけであるが、それは「我々の経験する限りでは、人間のみが脱‐存(Ek‐sistenz)の歴運の内へと放ち入れられている」(GA9,324)が故に、人間にのみ脱‐存は固有なものであるというハイデガーの説明に鑑みてのことであるという[6]。それに応じて、シュルツは、私は存在と存在者とそれらの関連に関しては現存在という存在者からのみ反省できるとする[7]。従って結局のところ、シュルツの解釈によれば、レーヴィットが言うように、第四版の「後記」と第五版の「後記」における異なった表明は、私の「自己理解」を異なった側面から表明したものだということになる[8]。

しかし、私は存在と存在者とそれらの関連に関しては現存在という存在者からのみ反省できるとするこの解釈の基盤になっている考え方は、人間が存在へと一方的に関わるという主体主義に陥っているのではなかろうか。存在と現存在との関連は、「人間への存在の関わり」の側面からも省察されなければならない。つまり、「存在への人間の関連」という前期ハイデガーの主体主義的傾向に「人間への存在の関連」を対置し、バランスを取り戻すことが必要なのである。我々は、細川亮一の見解に従って、これが 1930 年代に遂行された「転回(Kehre)」であると解釈する。細川は、「転回＝思惟の転換」とする解釈が前提としている「思惟の転回」あるいは「思惟における転回」という表現は、『ヒューマニズム書簡』においても、他のハイデガーの著作、講義等においても見当たらず、ハイデガーは「思惟の転回」ではなく、「転回の思惟」を語るのだと指摘し、この「転回の思惟」という表現は、転回が「思惟の転換」ではなく、「思惟されるべきもの」であることを言い表していると述べている[9]。細川のこの見解は、何よりもハイデガー自身が、リチャードソン宛ての書簡のなかで、「転回はまず第一に、問う思惟における出来事ではありません」(BR,ＸＩＸ)と明言していることによって裏付けられる。転回とは、「原存在は、それが現成するためには人間を必要として用い(brauchen)、そして人間は、彼が現‐存在としての自らの究極の使命を成就するように原存在に属している」(GA65,251)という『哲学への寄与』の言葉が言い表しているように、「人間への存在の関連」と「存在への人間の関連」とが

---

3 Ebenda, S.119.
4 Ebenda, S.120.
5 Ebenda, S.119.
6 Ebenda, S.120.
7 Ebenda, S.118.
8 Ｋ.レヴィット『ハイデッガー――乏しき時代の思索者――』杉田泰一・岡崎英輔訳、未来社、1991 年、77 頁。
9 細川亮一『意味・真理・場所』、創文社、1992 年、21 頁。

「共属(Zusammengehören)」のうちに担い保たれているという事態を指す。共属ということが意味しているのは、細川が言うように、これら二つの関連が一方向的でなく、相互的、相補的であるということである[10]。同様に、エーミール・ケッテリングも、肝要なのは、人間本質と存在、存在と人間本質とが交互に向転(Zukehr)することを見て取ることであると述べている[11]。転回のこの相互性、相補性、ないしは交互向転は、リチャードソン宛ての書簡でハイデガーが1937/38 年冬学期講義の第一草稿から引用している一節の最後の転回の定式のうちで表現されている。「存在への関連における人間――すなわち転回のうちに、人間への関連における原存在とその真理」(BR,ＸＸＩ;GA45,214)。前半が「人間による存在の企投すなわち存在理解」を表わし、後半が「存在の真理の内への人間の脱‐存」に対応する。『ヒューマニズム書簡』によれば、脱‐存とは「存在の真理の内へと外へ‐出て‐立っていること(Hin‐aus‐stehen)」(GA9,326)を意味するとされるが、しかしそれは人間が存在の真理の内へと能動的に出て立っているということではなく、むしろ存在の真理の内へと曝されていること(Ausgesetztheit)を意味しているのであり(vgl.GA9,192)、すなわち「人間への存在の関連」である。シュルツは、ハイデガーの前期の思索における現存在は「全体性」として自らを基礎づけようと意志しつつもこの意志の挫折を経験し、しかもその無力において自己主張するが、この自己主張の意志を現存在が放棄し、存在によって「曝されている」ものとして自らを甘受するようになるところに転回を見ている[12]。しかし、この曝されているものとしての現存在の自己理解において「人間への存在の関連」が「存在への人間の関連」を圧倒し、これに取って替わるのだとシュルツが考えているとすれば、それは彼の誤解である。「存在への人間の関連」と「人間への存在の関連」とが相互に補い合って転回が性起するのであり、そのどちらか一方だけを強調することはできない。それ故に、『根拠の本質について』第一版(1929)の欄外註で、原存在の真理をその転回の点で遮蔽したままで現‐存在を思惟することが虚しい試みだと言われているのである(GA9,174,Anm.a)。

他方、レーヴィットの解釈もまた不十分である。彼の解釈は次のようなものである。『存在と時間』においては、存在は確かに「端的な超越者」と呼ばれて終始一貫して存在者から区別されるが、しかし決して存在者から引き離され、あるいは絶対化されるわけではない。存在は「存在者の存在」であり、飽くまでもそれに留まるのであって、存在が超越者であるのも、現存在という存在者が世界へ向かって自らを超出することによってなのである。それに対し、後になってハイデガーは存在を、あらゆる存在者、従って現存在からも引き離すことにおいて絶対的なものとして据えるが、このことは彼が存在的‐存在論的差異を、存在者とその存在者性あるいは存在の仕方との区別を越えてこの両者（存在者とその存在者性）と存在それ自身との区別にまで追い立て、このようにして存在それ自身の無制約的な優位を、とりわけかつて方法的優位を有していた超越する現存在に対してさえも、そうした優位を確立することが必要だと見做

10 前掲書、27 頁。
11 Emil Kettering, *NÄHE. Das Denken Martin Heideggers*, Günther Neske, Pfullingen 1987, S.332.
12 W.Schulz, *op.cit.*, vgl.S.116.

したということを意味するにすぎない、とレーヴィットは述べる[13]。つまり、「後記」における記述の変更についての彼の解明は、彼なりの解釈における「転回」を基軸とするものであると見られる。しかし、先ほど明確にした我々の転回解釈の立場からすれば、現存在に対して「存在それ自身の無制約的な優位を確立すること」を転回と捉えるレーヴィットの解釈は維持できない。それに、彼の解釈に従うならば、第四版の「後記」での「存在は確かに存在者なしに現成する」という記述は、第五版の「後記」での「存在は存在者なしには決して現成しない」という記述の改訂であることになるはずであり、順序が全く逆転してしまう。結局、彼は「存在は本質的に、我々の乏しい人間存在を必要ともせず、頼りにしてもいないのではなかろうか」[14]として、「存在は確かに存在者なしに現成する」という考え方に付く立場を示していると考えられる。ここでもやはり「存在者」は現存在と捉えられているのであるが、その問題はさしおくとして、存在は現存在なしに現成すると考えるのは正当であろうか。存在の覆蔵性を覆蔵性そのものとして明け開き存在の非 - 覆蔵性を見護る人間が存在しなければ、存在は覆蔵されたままに留まり、決して現成することはできないであろう。

「後記」の記述の変更に関する問題を解明するに当たって、E.ケッテリングは、存在と存在者との関わりには三通りの観点の下で取り組むことができると提唱する。（１）差異の「極(Pol)」（存在）としての存在から。この「極」は存在者から区別されたものとして存在者に依存している。（２）差異の統一的根源（原存在）としての、すなわち区 - 別としての存在から。この区 - 別は存在と存在者との区別性(Unterschiedenheit)に先行しており、従って存在者には依存していない。（３）差異の「極」としての存在者から。この「極」は、他方の「極」（存在）という意味においてであろうと、差異の根源（原存在）という意味においてであろうと、常に存在に依存している[15]。以上の三つの観点を提示した上で、ケッテリングはマックス・ミュラーによる解釈を紹介している。

ミュラーの解釈とは次のようなものである。存在自体は存在者に対する差異を「もっている」のではなく、差異「であり」、そして差異とともに、差異づけられたもの(das Differente)を同時に自らのうちに担っていることによって、存在は確かに存在者なしに現成することになる[16]。この意味での存在は、存在と存在者という二つの極の内へと自らを離し置く統一的根源である。それに対して、存在を極として考察し、つまり存在者に対する「他者」として考察する場合には、存在は存在者を必要とし、従って存在は存在者なしには決して現成しないということになる[17]。ハイデガーは暫くの間、存在はそれ自身からの考察のうちで把握され得るのであって、存在者からは把握され得ないという仕方と、存在はそれ自身からして或るときは「根源」として現れ、或るときは「極」として現れるという仕方とを、既に「原存在」と「存在」という表

---

13 Karl Löwith, *Heidegger. Denker in dürftiger Zeit*, S.Fischer Verlag, Frankfurt am Main 1953, S.40.
14 Ebenda, S.42.
15 E.Kettering, *op.cit.*, S.86.
16 Max Müller, *Existenzphilosophie im geistigen Leben der Gegenwart*, 3.,wesentlich erweiterte und verbesserte Aufl., F. H. Kerle Verlag, Heidelberg 1964, S.43.
17 Ebenda.

記法において区別しようと試みていた[18]。従って、ミュラーの解釈によれば、ハイデガーが存在を原存在として思惟する場合には、彼は差異の統一的根源を念頭に置いているのであり、それ故に「存在は確かに存在者なしに現成する」（第四版）ということになる。それに対して、存在ということで差異の一方の極としての存在のことが考えられている場合には、存在は存在者に依存するから、「存在は決して存在者なしには現成しない」（第五版）ことになるのである。

ミュラーのこの解釈は、1976 年の全集版において公表されたハイデガーの欄外註によって確証されるとして、ケッテリングは概ねミュラーの解釈に賛意を表している。そして、ケッテリングは次のような欄外註を列挙する。すなわち、第四版において「存在」という語に付された「原存在の意味において」(GA9,306.Anm.d)、「確かに」という語に付された「存在の真理においては、差異の本質としての原存在が現成する。~~原存在~~としてのこの原存在は差異に先立って性起であり、それ故に存在者なしにである」(ebd.,Anm.g)、そして第五版において「現成しない」の「現成」に付された「存在の現成、すなわち原存在、区別 …」(ebd.,Anm.e)、以上の欄外註である[19]。しかし、差異の統一的根源としての原存在は存在と存在者との区別性に先行しており、従って存在者には依存していないとするケッテリングの指摘、および「存在は確かに存在者なしに現成する」における「存在」は原存在として捉えられており、差異の根源が念頭に置かれているというミュラーの解釈は正当であろうか。彼らは、先に引用した 1940 年のニーチェ講義で言われていたことを忘れてしまっているのではないだろうか。「『差異』という名称のうちで告示されているのは、存在者と存在とが何らかの仕方で相互に - 分けて - 担われ (aus-einander-getragen)、分かたれ、それにも拘らず相互へ関連づけられており …」(N Ⅱ,209. 下線は引用者)。つまり、差異においては存在と存在者との分離の局面だけでなく、両者の相互関連の契機も重要なのである。先にも言ったように、存在が存在者から単に分離されるだけでは、存在は直ちに存在者へと転倒するだけなのである。ところが、ミュラーもケッテリングも差異における分離の契機だけを強調し、存在と存在者との相互関連の契機を見落としているが故に、第四版の記述を容認することができるのである。差異における相互関連の契機を見落としていることからの帰結として、ミュラーは「存在は存在者なしには決して現成しない」における「存在」を差異の「極」としての存在としか解釈できないのであるが、実はそれとは反対に、ここでの「存在」こそ、存在と存在者とが分離されつつ - 相互へ関連づけられているという、差異の根源としての原存在を指しているのであって、決して差異の「極」としての存在を意味しているのではない。ケッテリングが、第五版における「現成しない」の「現成」に付された「存在の現成、すなわち原存在、区別 …」という欄外註に注目するとき、ミュラーの解釈が明らかに誤りであることに気づかなかったはずはないのであるが、それにも拘らず、第五版での「存在」を差異の「極」として解釈するミュラーの見解に同意するのは理解に苦しむところである。

---

18 Ebenda, S.44.
19 E.Kettering, *op.cit.*, S.86f.

4 「存在は存在者なしには決して現成しない」

我々の解釈を示そう。第四版での欄外註でハイデガーが「~~原存在~~としてのこの原存在は、差異に先立って性起であり、それ故に存在者なしにである」と書くとき、彼は「差異」ということで悟性の表象作用による「区別づけ(Unterscheidung)」のことを考えていたのであると思われる。つまり、第四版の時点では、原存在は確かに差異の根源を指しているが、但しそれは区 - 別における分離の局面としてしか未だ捉えられておらず、従ってこのように把握された限りでの原存在は悟性によって区別づけられた存在者性なしに現成するというわけである。それにしても、「差異」という語で「区別づけ」のことを指すというのは不用意な言葉遣いであり、ここには言葉の使い分けの上での混同が窺えるが、それは「差異」と「区別づけ」との相異が思惟され始めたこの時期には致し方のないことなのかもしれない。実例を挙げよう。先に引用した 1940 年のニーチェ講義では、「我々が分け担いを形式的に『区別づけ』として思惟し、そしてこの区別づけのために、区別づける『主体』の一つの『行為』を見つけ出そうとするならば、分け担いは把握され得ない」(NⅡ,210)と明言されていながらも、他方で「『差異』としての区別づけは …」(NⅡ,209)とか、「我々が軽率に、区別づけ、すなわち存在と存在者との間の分け担いと名づけているものは …」(NⅡ,210)といったような、語の使用の上で厳密さに欠ける言い方が為されている。つまり、この時期のハイデガーにおいては、「差異」あるいは「分け担い」と「区別づけ」とは、事柄の上では区別されてはいたものの、用語の使い分けとしてはまだ両者の間に揺れ動きが見られるのである。それに対して、第五版の時期には、用語の使い分けも定着し、「区別づけ(Unterscheidung)」と「区別(Unterschied)」が峻別されて、「存在の現成、すなわち原存在、区別 …」という欄外註が付される。ここでの「原存在」は、もはや存在と存在者との分離の契機だけから思惟されてはいない。第五版と同年の 1949 年に出版された講演『真理の本質について』第二版に付加された終節の註記には次のようにある。「本質の真理への問いは、本質(Wesen)を動詞的に理解しており、この語において、なお形而上学の表象作用の内部に留まりながらも、原存在を、存在と存在者とを統べている区別として思惟している」(GA9,201)。区別が存在と存在者とを統べているとは、単に両者を分離しているというだけでない。そうではなく、それは分離しつつ - 向かい合わせていることを表わしているのである。この分離しつつ - 向かい合わせるものは、『真理の本質について』第二版の翌年 1950 年には、「区 - 別」として明瞭化される。すなわち、「アナクシマンドロスの箴言」に次のような欄外註が第一版(1950)で付されているのである。「区 - 別は、どこまでも存在者の存在(Sein *des* Seienden)に留まるあらゆる存在からは限りなく異なっている。従って、区別をなおも『存在(Sein)』――それが y を伴っていようと、いまいと――で以て名指すことは飽くまでも不適切である」(GA5,364.Anm.d)。

この時点で「区 - 別」として明瞭に把握されているものは、1949 年の段階ではまだ「y を伴った存在」、すなわち「原存在」と名指されているが、しかしここでの原存在は、もはや存在と存在者性とを分離するだけには留まらず、同時に両者を向かい合わせるものとして思惟されている。それ故に、『形而上学とは何か』第四版の「後記」での「確かに」に付された第四版の欄外註に更に第五版で付加された欄外註では、「性起としての原存在からの予示(Vordeutung)であ

るが、しかしそこでは（第四版では）理解されていない」(GA9,306.Anm.g)と言われているのである。つまり、「存在は確かに存在者なしに現成する」という考え方は、未だ区 - 別における分離の局面としてしか把握されていなかった限りでの原存在からの「予示」に留まっており、それに対して原存在が存在と存在者性との「分離されつつ - 向かい合って」という区 - 別の十全な意味において捉えられるならば、「存在は存在者なしには決して現成しない」ということになるのである。このように見るならば、第四版の「後記」での記述から第五版の「後記」での記述への改訂は、ハイデガーにおける原存在の把握の深化を物語っていると言うことができるであろう。第五版と同じ 1949 年に『根拠の本質について』の第三版に付加された序言では、「存在者に対する無い(das Nicht)としての存在」(GA9,123)と言われている。このことが意味しているのは、存在は、存在者性では無いという限りでの無として、飽くまでも存在者性に向かい合いつつ、そこから分離されるという区 - 別の関わりにおいてしか現成しないということである。

ハイデガーのテクストからの引用・参照指示は以下の略号を以って行なう。

全集版(Gesamtausgabe, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main)

GA5 *Holzwege* 1997.

GA9 *Wegmarken* 1976.

GA45 *Grundfragen der Philosophie. Ausgewählte 》Probleme《 der 》Logik《,* 2.Aufl. 1992.

GA65 *Beiträge zur Philosophie (Vom Ereignis),* 2.,durchges.Aufl. 1994.

単行書

N II *Nietsche II,* 5.Aufl., Günther Neske, Pfullingen 1989.

WhD *Was heißt Denken?,* 5.Aufl., Max Niemeyer, Tübingen 1997.

ID *Identität und Differenz,* 10.Aufl., Günther Neske, Stuttgart 1996.

VS *Vier Seminare,* Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main 1977.

BR Brief an W.J.Richardson vom April 1962. in: W.J.Richardson: *Heidegger. Through Phenomenology to Thought,* Phaenomenologica 13, Martinus Nijhoff, The Hague 1963, ⅤⅢ－ⅩⅩⅢ.

（にしまつとよき　現代思想文化学・博士後期課程単位取得退学）

„Das Sein west nie ohne das Seiende.“

— Über die Differenz der vierten und fünften Auflage des *Nachwortes zu : „Was ist Metaphysik?“* —

Toyoki NISHIMATSU

Heidegger schreibt an einer Stelle der vierten Auflage des Nachwortes zu *:“Was ist Metaphysik?“*, „dass das Sein wohl west ohne das Seiende“, ändert diese Stelle aber in der fünften Auflage ab in : „dass das Sein nie west ohne das Seiende“. Um zu verstehen, was Heidegger mit dieser Änderung beabsichtigte, ist es notwendig, sich über die von ihm eine Zeitlang verwendete Schreibweise „Seyn“ klar zu werden, die das Verhältnis des auseinander- und zueinander Getragenwerdens von Sein und Seiendem im Sinne der vom Sein unterschiedenen Seiendheit, d.h. den Unter-Schied beschreibt.

Die Randbemerkung zum „Sein“ an der vorliegenden Stelle der vierten Auflage lautet : „im Sinne von Seyn“. Dabei versteht Heidegger dieses Seyn meiner Ansicht nach nicht als Unter-Schied, sondern nur vom Aspekt des Auseinander des Unter-Schiedes und meint deswegen, dass das Sein ohne das Seiende west.

Im Unterschied zur vierten Auflage versteht Heidegger das Seyn in der fünften Auflage jedoch als Unter-Schied. Das Seyn und das Seiende, d.h. die Seiendheit, sind nun nicht mehr nur auseinandergehalten, sondern auch zueinander getragen. Wird das Seyn in diesem umfassenden Sinne vom Unter-Schied her verstanden, ergibt sich, dass das Sein nie ohne das Seiende west. Entsprechend dem oben Ausgeführten lässt sich an dieser Stelle des Nachwortes von der vierten zur fünften Auflage eine Vertiefung von Heideggers Denken über das Seyn ablesen.

「キーワード」

存在それ自身、原存在、区 - 別、区別づけ、現成